# 最上英雄録

六

内閣文庫
番號 和 16157
冊數 8( 6 )
函號 151 78

内閣文庫
和書
類號 一六一五七
冊 八
架 九
函 一五一

国立公文書館
National Archives of Japan

最上英雄録巻六

荒熊吼右衛門由来

付 江戸郭大浮気主計無言之事

九月末主湯の表中風あり猿山の馬入道
ふる。大小の猿数千疋引つれ速水蘆ゑ陣中へ
入来二度ゑ引うつ引さ丶ふ陣中を
主湯乃従義ふして終日の酒宴ふ菊の子を
とのゝしゝ乙して諸将卒碎眠最中ふ
しゝぐ大ふ狼狽して逃さわぐ所乃傷人
もびゝゝゝゝ人とゝ丶ゝ丶ゝ丶

まのうちの。所事は其のうち考へし。ら
内に迫郷の山中ふかうくもしくまる強盗山賊
等あまたし虚は武具を具とうばひと
らんと猛獣の後詰しらくて。夜炮と雷
の陣中へ向て打てかけ。或はあらつもて
打入しかもやくらう勿論悪入道の方もて
畜類の事なまぐ。敵味方とも志のあるが
ざうしよや。又は風雨つよくもへ見るがさうり
しよや。山賊ごりつく汁うも思ひがけ
なく傷とうくるものもあるうしにこ

し猿山より右源太あるくる。山賊乃大将荒熊
吼右衛門といふる大勇不敵の者あり。ねらの
くあ。西の方紀州熊野の方に出ましたりしが猟師
家を捨仕して。かまの時より勇力の事とこ
のく。朝夕田猟と事にくらせ。生活して利欲もなく。
色情ひかなる性付なり。十八歳のくる。家中
は色ものくる友達あり。人の妻
もくひくて。夫と切殺しその妻と
むし立のくるやつ。或人とも入水せし被
家しくて。実くらの山中にくるも住居を。

胡乎往来の旅人とゝまるやまし。金銀衣服と
うぐひすうゝ。又あるはすゝまの下の老木にいつき。
城下の武家町家つゝ財宝食物とうばゝ。
のうるゝかゝるゝ。寛永の頃
北条天草の一揆ふ法蓮寺して。東京の軒ゝい
る山法ゝ。南蛮流の妖術ゝまるゝ
ゝ。多獣異類のもの〻ゝうつゝ事奴僕の
ごゝ。天草落城の時板倉伊豆守殿
せゝ。いうゝ。ゝんまゝ逃ゝ。承應乃
ゝゝめゝ。ゝ山中に住居しゝる。

迦郷の強盗山賊ゝ。皆ゝゝゝ
ゝ。ゝゝ。ゝゝ獣とも訓ん事と
ゝ。猿山の道大小の猿ゝ。
ゝゝ。ゝゝ猿の事とも
ゝ。ゝ表向ゝ猿ゝとして。
ゝ。ゝ婦人飲食金銀
金銀とゝ。ゝ
金銀ゝ山不持ゝ。淫酒
ゝ。ゝ人ゝ
猿山の道大小猿ゝ。ゝ

度こなども学ぶ命とそもそもといさぎよく強
勇とものこせしとうて。よく幸なりしも下の強盗
ども残いづし。妖術と猛猿とを引しら。奸悪
とりしなまにせしなり。安藤いかの悪人ある
づしこの悪ものどもたち猛獣ものが暴悪と
あるまいものこの仕しぶたちわた敗となし。
せん方なく城中へ引のづ。もふ使者ゆきて
お城へ注進。庄景後河いこれ出るあり。
ざるづしこの大ゆ心痛しこの連白石の城へ注進
もつぶ庄金小十郎小十郎大病おはりづしこの。

後河い一人へこの南蛮しもふ書状とお
しこの江戸の屋敷へ注進。この度乃注進。坂田
勇助なり。庄景が書状と懐中しこの一巻へ
このこのこのこのお城せうこの日金蔵五郎七
主宿へこのあるつもぶ勇助づこの一巻。もつて
光御このの江戸へ出ゆめてゆのてさしぶ
この細あまこのおせこのて汗ゆ敷あてこの城
つもこのこのぶ。城下とこの三里のこのて村このの
関ふ行このる関もこのいでこのこの宿老北事
の内方このもせよ寿なこのこの。この関ふ

明て通しゆるさるゝ。五所七大
よいうも。敵とあらそひて走るゝ関をとおく
のゝきうるゝ。関所の常法も常日ゆるゝ
今ゆるゝもゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。ゆるゝ。
一云ゝゝゝ

今年中ふしてはべりしあるべしとぞ申しあ
へり
御年寄方の門内に同席の僧たち
をつくしあまの僧たち方丈方すべて法眼伊達家に
政宗朱武功の家よりも仏合の法病まさぐ
禽獣のあるまじくたまたまして獵師多方の中
付てもたづまるべくくく

ふるさと付しこゝろのくせ。
南部猿山の殿様。のしゞ安藝ゞ大敗荒熊
う評判。うつ立所七ゞ最上川のうつくしく
流しくるくるとどくらくしゝ中速てくるる。
主計てゝはゝて承知。明日妻綱よりよく入しゞ。
忠宗綱宗大ゝ驚うも重ゝ預とゝ下向もべ
し先主後ゝ一統の評議とゝ。廣島ふ
が所ありりゝ江戸方主後ゝ家同異船
山名直江濱ゝ御大事。
芦名若狭殿下生駒川筋後遠藤武蔵

うゝ行う宿老執事ゝ為居法扱ゝ一同ゝ丸ゝ
ゝのうちふゝえゝの名代坂田勇助と
百ゝ。ふえの大変と要綱ゝうゝ。ゝて何も
実見いゝ。ゝに江戸ふえの主後人ゝ。
口とうつゝ。何のゝもせよふえの大変
人百業ゝいりゝふゝ西下向ゝて西海
後ゝ行ゝ。ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ主計ゝゝみゝて板江戸ふえの主後
一同ふゝあらゝゝ事と芦名ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ。いまゝ孔世

ものなる儀なれ共、事と成たるよせて流謀
あり。土佐とのごとく流刑に成られし
うらもてに申しこしたる大切なる文たるべくもさ
かく貪獣乃あるもどしかしかの山賊共の考えるべし
なるべき。堂々たる大名なれ共、左切の江戸出立前
と問答あり。自分こと出帰ほあるべきやて。
云後のはなし。法大名方乃ち法もいうべきなり。
又てくく貪獣山賊の強勇とさしてあるまし。
云後出ずと雖ども、こうしけば。辺溝武と
こがく上杉作南部法輕乃大法度なるべ

ちゃ虚ふ答へて。ぱりる拳勇あんもちう
ぐくしてくくしてくくしてくく不相なる。表文張河
実父土所七日作付して。こびく柵と丈し
溜とうまく。猛獣の果てまして用心く。
とてくも苛年めくやや流言もしいうまして
明年四月出帰ほの時まで出待あるべく。
まで計策と公山賊の大勢とりて後策仕の
く。猛獣変化の子細もおろう。退治いくも
ま安くおかべく。何くなりても苛年乃
内云後の上ぜと強うしの策。拵るべく

あらとをつく弁舌を以て言ふ所中りなば
ほうびあり重職たる一同こゝに一決しけるの
ちと通れるまゝ後河が方へおくり又ふ
一社の俳義の法式と為せる段人中へ中ぶるべし
とりかゞ山賊石捕方の義も油断なく計ひ
しに坂田勇助十度さまたりに勇助是て
即ち江戸屋敷とゝ汗ゐ鞭とあて。
十月十五日小仙墓へ出る。後河ふ返書と見し
みゝびふ口上乃趣と述りれば後河いう拙た振ま
あるべきりとも永く心中狭くしてゝ二日も

もやゝ一応安寧月せんと思ひまち乃四下向
と繰返ひ上りしに計が量見ふ又ふ
ところて老練ふ思ひ老ひ乃ひあるべ
と感ひ也。土所七ふ計ふ陶ふと知
ふ扱ひ事と為ひ。この後ふ雪ふ日と過
くもゝ山一面ふ人ふ乃往来も
自由ふ成ひ。彼猿山ふ三里ふ
の柵とあひ陣屋とふ又百の人数と
ふ並て毎日かゞり火焼ひ竹の筒の
炮とふ用ひ空ふ撃ひ猿

もとより山賊もいうまでもなく荒熊の沙汰もやがて城下も
まづしくなり安穏なる田民業とさのみ
うてみぐるり目もあて夜春乃ちう胡沙待
なりけり。

## 坂田勇助荒熊を石捕

付まるゝ下向沙汰まで事

せうとて去年打つづき目も夜春とむしろい
ぐも。たゞ山沙奥は紀嘉城下へ出て去れば来
山賊猛獣のなりはやまさもまづ安さんも

なし。坂田勇助こゝ今年の冬の寒汁とうつてつけ
猪山のもりの乃陣屋へ来り胡蝶人るの指揮
世話してありけるが。ある日雪も一ちぢやくて。
天氣もまこうしかるにづつ蕨笹の
中ふ孔雀。だふと蕨と下紐二三十人ゑ酒
樽と武十。又迫日打ちる炮の拵拵乃廉兎
十五六疋うつて。雪とうて山中乃東谷山賊
乃家ふ立ちて大火りる。迫日天氣いまゞ寒徒
なりて。酒ゑ出て。まりんうて指系せりう
中ふ陣屋うて沙汰。猪山退治仕沙大拵坂田

富助のいつぐ賊どの為て富助が武勇も
世及びなきいのちいきあるうちのこそまま
荒熊は酒を飲まず荒熊は坂田の自分酒肴と選び
来たりつゝ大なるもつぐなんかの古迹
坂田莫尓打もしうつゝや荒熊は英雄
たる事い新しく志をつゝ今日家知てゝ
のんくつの来たりて志を其愛通り
持来りし酒肴ごのこりて口としゝ浸出
し今酒とあくあめ熟と成て着けて底
為て武御学と続論しつゝ酒と飲て

荒熊ふもしもしの荒熊氣味あしくこゝも
せんくつのくけのしつ富助い後先と食じ荒熊が
手下の賊どもふ沒に酒と志めてのしつ
もらい去年い来津屋出来やしつ後い墨の通
酒とえくもつ酒食ごの不自由ていづもも
強義せふ今日かつる大響ふ重事みれば荒熊
そじの最初こゝ底志志わい用心せしが。
いつも富助が打ゝて武具の形ものゝ松
ふのまつ逐ゝ乙ゝて十ゝ破とのゝ
しゝてゝの賊どゝ何ものゝ強しもてゝ

乃儀健。小いうて芸年よりあまりて、あまたの人のむ
れて、皆、破倒してもとおたり。富助い打ちてよろ
まして、下知をくわだ。陣所のよしつ、後者二三十人
ものいくさ、用心のつよ過くうち休し、歩卒
四十人打ちきりつく、乱入もとめ、荒熊の人数
もとあげ、刀そうんとする所に、富助一あてあ
こ、逃かつめる。その時、賊ども、沈
破最中よりこりの二百余人皆
つめうて、山寨に火をもとめ、又賊のしつ
らもこ城下の民家の婦人ども。

各枝助して東谷といづる。この火をうけて、猪
山の足又道大小の猪共二三百疋発動して
来りしこと。富助事こもせず敵して、足又道
二疋まで打ちうしこの猪共十四五疋も打殺し。
郷の陣屋へ引ぐ。ぐるぐる城へ送りて
獄屋よりこの吟味しこれ流石の荒熊も最
初のの悪事捕同よりまてのこと申ける。
後河とこの後人共荒熊の賊の不届
なる中に乃ぐ。まつ一族の安蔵陣中へ猛獣
乃虜共ぐて人数とこの乱妨せし時不届

心極めて事を謀る。衆より中付りる。徒党二百余人
もるべく所存なるべし。金毒五所七
ヶ所。ことに家ごとに禍を轉じて福となる。
計策あり。今女房衆ばかりなり。荒熊に決して
言捕るべしとわがもとに同じ。ものとよび。
同じ親方を出して親戚者共なる者四人あり
ここにこれ人をもつて人をもつてこれを
彼等ども一合の五所ちがあづけ活るべしとなる。
その後五所七彼賊ども私宅よりしたがひ細
と存じて。ここにして五所七家内ならびに坂田ば

百捕しに得ばかりて。その荒熊は乳を吸ひ
て貪慾もつこと大なり。猿山の悪人道とみづけ
亜里中に猿と申し神の悪事とのし。里人を
もつてしめらるの者ども下賤所いづく。民家の
財宝婦人とうもつぶしいるさんれども猿山の悪
入道大小の猿共。荒熊と相互のごとくなり
ものもつぶ。猿山の奥八里ヶ志賀山獄
と申す山門なり。ものを年久しく功労なし猿
業ヶ一方に報ずべく住所。猿共の悪入道
又もつる支えるし山中に大入道ことなり。

山大入道と荒熊も自由に百姓ふるまいをいたし
酒食などと送りて邪魔をせ
らるべきはずにあつらえ申し山大入道はまた
下の方へ又幾よりの入道大小猿ども数ばかり
門前に荒熊の荒熊に去年来た地の門番衆しかれば
生産をうばわれ山寨と称し武者どもに附属
しかるべきひとりの城下に居住の者商人
商賊とのこと打命山寨へ休息仕りた
もく志賀嶽と一名奇山嶽と字しかく
淡顧絶峯。古木蔭の雲雀ものうしかく。

容易に通行なりがたく。京都拾の門意
恵と以一命門内にさまもつて山後門泥代の
節門先も仕志賀嶽の屋敷門仕ばかり。
これまでの先号皆荒熊の面あるべ。
門卒門免許下さるべ。五郎七
のくつて地の沢まるべうけ。
汝等ば一命とば助者べ。猿山泥代の案内せ
よ。志賀先百九郎荒熊に志賀
もるとあるべくくくるまべ口形と禁ば
ば他人ものなし山寨より遣問

老ゞの婦人めをいとなみてあるとの
親里へ逃てゆくもいづれも坂田ゞ富力智行と
感し。又母のごとくなるもの
うてゆくゆくは四月ゆうもけうしゆ清兵衛忠宗朋臣
もいづれ表ゆきもの服ゆう帰ゆあり。水戸の
宿老格側用人庁景三郎行とともうしうして旧例
のごとく歳末ふけとなる。四月下旬帰城を
しらべ庁景孫ほのぼの連れ去れば東儀ゆの変
事猛獣ごとくにのみあらべ安藤ゞ家
人八百余ゆうゞ殺傷し。安藤もうゆく

逃うつ。ゆうて後も六ゞまで伊達一統の門一門安藤
家のかゆうして。征伐あり。しばらく四五疋と対
ゆうしのうゆうゆう。味方のいつも二三十人対
死ゆ。このうち江戸表ゆ義勇より富中
も柵と厳重ゆうゆ。まづ征伐をやうく里一出
る振もゆ用心堅ゆ仕ゆ。一刻もやく
ゆ征伐ゆあり。夜ゆ。九ゆ賊蒼徳孔太郎ゆ坂
田勇助逃ゆ百九十ゆうゆ。つゞいて金
東土帝七ゆ。蒼徳ゆ下の賊徒ゆ助命下ゆ
ゞ。志摩嶽の家内仕ゆ預ゆうとゆ。

もも高人のもとに不たゝかうして賊徒に助命
素内のゝめ先はつゝみ出ごゝの命なりかくて秘
なく沉伐を討うまとんうゝ庁是孫にと越軍帥
うゝ。五万の人数を分けて先まつゝみ平井を水
搦井年人ゝまゝを従も。今度五郎芦名の
高執事を付添ゝ城代ゝして城をこゞまり。軍
中小兵糧乃運送は事とつゝさゞゝ。庁是
主計ゝ中軍の大将ゝして芦名の例とゝ
みるゝゝゝゝゝゝ今ゝゝゝ。尤一門の安藤ゝ領所
乃事ゝまゝ。一高を先まゝゝゝゝ。軍

今まゝでを宮ゝゝゝや打ゝとんゝゝを去年の
鴻器一揆ふ出ゝゝゝ。ゝゝ小五郎和田小四郎河内
ゝる後ゝ左指揮の勇力の法が年いづもも
今女内侍中さんとの預なゝ。尤五極ゝゝて。
比老ゝとゝゝの勇士組ゝて乃人ゝゝ組
ゝゝみいづもも武兵ゝ兵ゝゝのゝゝ。
和ゝ南風のゝゝも添ゝ和月下旬。仙嘉乃
城を發向あゝ。領ふみゝゝゝゝ猛ゝと
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月ゝ廿日後ゝ左指
小野の里居を旅鉞ゝゝ。父勘解由世ゝ

ある事ゝ和ごり下る仏ゝる賓意とし
廿六日。長沢弥五郎ゝ父大隅ノ長沢の陣屋へ
沈谷あり。廿七日に安藝ゝ後ゝる浦津の城へ
玉ゝあり。安藝領地境まゝ迄ゝ。和ゝと
射しゝの夜中軍ゝとゝ。廿八日廿九日ゝ
雑ゝ等ありゝ休息し。卅三十日早朝ゝ安藝
ゝ勢二ゝ人と引率し一ゝゝの山し猿山
いゝゝゝる猿山林の陣屋ゝ成率の侍大
将坂田勇助五百人の組下と引つゝ猿山の
陣用意とゝし。ゝ朝日花やゝ

ゝさゝゝ。ゝゝの軍ゝ五ゝ余人と強ゝ。
いゝゝゝ武具ゝ美ゝ。ゝゝゝゝ列と四し。
ゝゝ白羽紋の陣用意ゝ長くゝゝゝ言
乃ゝゝゝとの志づゝ伊勢勇士ゝ圍繞ゝて陣
屋ゝゝゝ。迫来ゝ手打つゝ。
ゝ鄙ゝ静ゝ。軍ゝゝゝゝ。
めづゝゝ仕親ゝゝゝゝ迫の老ゝ民
廣男女ゝ。ゝゝゝゝ入ゝゝ今日ゝ城
の刻限ゝ先ゝ結ゝて出ゝと物見し大
ゝゝ感ゝゝ。ゝゝ向ゝ。

いうるの恵獣変化なりこも。漳凝とぶ物
とももあるじ。感涌となづ。其しるさも却
と叢しるくりあるふるもなり。

最上英雄録巻上終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan